

「17年目の秘密」

第3話 「相手を想う気持ち」

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

谷島 春樹 (17) 中央高校全日制二年生

夏希 (20) 姉、キャバ嬢 (声の出演)

高崎 倫子 (17) 専業主婦

山岸 利枝子 (17) 中央高校全日制二年生

藤原 亮 (17) 中央高校全日制二年生

川村 浩輔 (17) 中央高校定時制二年生

靖司 (52) 父、会社員

愛子 (49) 母、専業主婦

謙輔 (25) 兄、会社員

牧 和哉 (17) 滝雀学園高校二年生

永井 聡実 (17) 滝雀学園高校二年生

松野 明 (31) 中央高校全日制教師

同級生 亜沙美 (17) 中央高校全日制二年生

同級生 剛士 (17) 中央高校全日制二年生

同級生 奈々 (17) 中央高校全日制二年生

同級生 紗耶香 (17) 滝雀学園高校二年生

同級生 香澄 (17) 滝雀学園高校二年生

同級生 裕梨 (17) 滝雀学園高校二年生

宮田 哲男 (48) 真由子の父、医者

寺沢 隆三 (47) 喫茶店店長

1 中央高校・全景（朝）

2 同・二年A組教室

利枝子が登校してくる。

利枝子「おはようッ」

と、春樹の席に向かう——読書をして
いる春樹。

利枝子「（ニコニコしながら）おはよう、春
樹」

春樹「おはよう。どうしたの、何か良いこと
でもあった？」

利枝子「春が来たんだね、春が」

春樹「何言ってるの、これから猛暑がやって
来るんだよ」

利枝子「鈍いねえ、春樹は。春が来ると言っ
たら、恋に決まってるでしょ」

春樹「恋……？ まさか、利枝子、好きな人
でも出来たの？」

利枝子「違う、私じゃなくて」

春樹「なんだ違うのか……」

利枝子「誰だと思う？」

首を傾げる春樹。

利枝子「聡実だよ、聡実」

春樹「え……？ あの聡実？」

利枝子「そうッ、聡実が恋をしたの」

3 山岸家・利枝子の部屋（第2話回想）

利枝子と聡実が話している。

聡実「いるよ、好きな人」

利枝子「えッ……？ 誰？ 同じ学校の子？」

聡実「それは言わない」

利枝子「良いじゃん、教えてよ」

聡実「だって、まだ告白してないもん」

利枝子「ひよっとして片思いなの？ 良いな

あ、そういうの。青春って感じじゃん」

聡実「諦めてるけどね。どうせ、私みたいな
女を好きになる男の人なんていないだろ
うし。片思いで良いと思ってる」

春樹「相手は？」

利枝子「教えてくれなかったの」

春樹「そこ、一番肝心なところなのに」

利枝子「あんまり聞きすぎると可哀想だと思
ったから……。ピュアじゃん、聡実は」

春樹「まあ、そうかもしれないけどね」

と、剛士が入ってくる。

剛士「おはよう。やっぱり、朝部活は疲れる
わ。これから一日が始まると思うと、ゾツ
とする」

春樹「バレー部も大変だね。そろそろ夏の大会も近いんでしょ。これからもっと大変になるんじゃない？」

剛士「まあな」

利枝子「私たちテニス部も、そろそろ大会に向けて部活の予定が増えるみたい。そう思うと、新聞部って大会がないから良いよね」

春樹「何言ってるんだよ。新聞部だってね、毎週発行するために、記事にできるような出来事を取材して、まとめてるんだよ。別

の意味で、体力勝負なところもあるの。大変なのはお互い様。文化部だから暇だなんて思わないでよ」

剛士「分かってるよ」

と、亜沙美と奈々がプリントを持って話しながら入ってくる。

春樹「(亜沙美たちに)おはよう」

亜沙美・奈々「おはよう」

利枝子「そのプリントは？」

亜沙美「文化祭の実行委員会の募集用紙。私たち、やろうと思って」

春樹「そっか。もうそんな時期だ」

剛士「すっかり忘れてたな」

奈々「みんなはやらないの？」

剛士「俺は、バレーの大会があるからな」

利枝子「私も大会がある」

春樹「俺は多分、文化祭のパンフレットとか、それなりに新聞部にも仕事が来そうだから、半強制的に実行委員会になるかも」

利枝子「亮君どうするのかな？」

春樹「そういえば、まだ来てないね。また遅刻かな」

と、亮が駆け込んでくる。

亮「おはようッ。ギリギリセーフだった」

春樹「もう少し余裕持てないの？」

亮「こっちにも事情ってもんがあるんだよ」

利枝子「ねえ、文化祭の実行委員会やる？」

亮「いや、俺は辞めとくよ」

春樹「亜沙美と奈々はやるみたいだよ。まあ

俺も、パンフレットの準備とかで、やるこ

とになると思うけどね」

亮「新聞部も大変なんだな」

春樹「まあね。けど、やりがいがあるから、

頑張るよ」

と、一同に微笑む。

5 同・新聞部室（夜）

春樹が、一人黙々と作業をしている。

と、ノック音がする。

春樹「はい？」

と、ドアが開き、松野が入ってくる。

松野「お疲れッ」

春樹「先生、どうしたんですか？」

松野「電気がついてたから、多分春樹だろう
なと思って。けど、そろそろ帰ったほうが
良いぞ。もう七時過ぎてるんだから」

春樹「もうそんな時間なんですねぇ。文化祭
のパンフレットの案考えてたら、時間忘れ
ちやいました（と笑う）」

松野「一回集中モードに入ると、時間忘れ
ことがあるもんな、春樹は」

春樹「そうですね（と苦笑する）」

松野「と言ってる俺も、集中状態になると、
時間忘れること、よくあるけどな」

春樹「なんだ、先生もやっぱりあるんですね。
そういうこと」

松野「やっぱり、集中するとそうなっちゃう
よな」

春樹「はい」

松野「春樹」

春樹「？」

松野「無理はするなよ。春樹は頑張り屋だということとは評価するが、無理がたたって身体を壊したことが去年あっただろ。またそんなことにならないように、ちゃんと、身の丈に合った活動をするんだぞ」

春樹「はい」

6 同・廊下く定時制二年教室

春樹が歩いている。

と、定時制の教室で、授業がやっているのが見える。

定時制二年生の教室を見る春樹。

その中に、浩輔の姿がある。

真面目に授業を受けている浩輔。

その様子を見て微笑む春樹——階段を下りて、帰っていく。

7 マンション・駐車場

原付バイクに乗った浩輔が帰宅する。

8 同・川村家・玄関

四DKの造り。

浩輔、入る。

浩輔「ただいま」

と、ダイニングのほうから、何かが割れる音がする。

浩輔の兄・謙輔（25）が出てくると、

謙輔「お帰り」

浩輔「また、母さんか？」

謙輔「ああ。また飲んでるよ。とても、俺た

ちの手には追えないな」

うんざりした顔の浩輔。

9 同・ダイニングく廊下

浩輔、謙輔、入る。

テーブルが、缶ビールやウイスキーのボトルなどで埋め尽くされ、その中でうずくまっている浩輔の母・愛子（49）

——隣で付き添っている浩輔の父・靖

司（52）。

愛子「（浩輔をジロリと見て）なんだ、帰ってきたの？ てっきり、もう帰ってこないんじゃないかと思った」

浩輔「……」

靖司「（浩輔に）風呂沸いてるぞ。あとは、もう浩輔だけだ。早く入って、もう寝ろ。明日も早いんだろ」

浩輔、うなずくと、廊下に出ていく。

と、愛子の声が聞こえてくる。

愛子の声「あの子と、親子の縁切りたいわよ。

あんな失敗作……」

浩輔「……」

浩輔、耳を傾けて、愛子の声を聴く。

愛子「謙輔みたいに、ちゃんと高校を卒業して、良い大学に入って、一流企業に就職して欲しかったわよ。謙輔は、成績優秀で大学も首席で卒業して、今では立派な商社マンだって言うのに……。どうして、あんな弟になっちゃうのよ。同じように育てたの

に、兄弟でこんなにも差が出るなんて……」

靖司「何を言ってるんだ……。謙輔だって浩輔だって、俺たちにとっては大事な息子たちだ。失敗作だなんて、よくもそんなこと言えるもんだな……。あいつだって、働きながら高校に通ってるんだ。とても俺たちにはできることじゃないぞ。立派なもんだって褒めてやるのが親ってものだろ」

愛子「何が立派よ。親の言うことも聞かないで、勝手に進路決めるような息子に、どうやって愛情注げって言うのよ。あの子の育て方、間違えたのかもしれない……。産むんじゃなかった……。…」

浩輔「……」

謙輔「そんな言い方ないだろッ。浩輔だって、まだ十七で、子どもだって思うかもしれないけど、自分のことは自分で決められる年になってるんだ。そうやって、いつまでも母さんの言うとおりになるとは思わないでくれよな」

愛子「何よ、みんなして浩輔の肩ばかり持
って……。そうやって、私を敵にすれば良
いでしょ。どうせ悪者ですよ、私は」

と、勢いよく飛び出ていく——浩輔と
ぶつかるが、有無を言わず、自室にこ
もってしまふ。

浩輔「……」

靖司「浩輔……」

浩輔、再びダイニングに入ってくると、

浩輔「俺は、川村家の失敗作なんだな」

靖司「バカ。酔っ払いの戯言たわごとを真に受けるや
つがあるか」

浩輔「アルコールが入ってるから、普段思っ
てる言えないことをこういう時に、一気に
吐き出すんだよ」

靖司「……」

謙輔「……」

浩輔「どんなに、母さんに失敗作だと思われ
ようが、俺は気にしないよ。俺だって、い
ざとなったら一人でだって生きていける

んだ。母親がいなくなつて、しっかり生きていける。春樹が良い例だよ。春樹は、親がいなくて養護施設で育つても、姉弟二人で助け合つて生きてるんだ。一人だと何かと苦労することもあるかもしれないけど、あんなこと言われるのと比べたらよっぽどマシだよ。この家出ていく覚悟なんて、ずっと前からできてるんだ。出ていけって言われたら、潔く出てくよ」

と、出ていく。

難しい顔でお互いの顔を見る靖司と謙輔。

タイトル

『第3話 相手を思う気持ち』

10 アパート・谷島家・居間

洗濯物を畳んでいる春樹。

と、携帯電話の音が鳴り、メールが受信される。

携帯を見る春樹。

夏希からのメールである。

夏希の声「お店の友達とお客さんとで、旅行に行ってくるね。一週間ぐらいしたら帰るよ。お土産楽しみにしててね」

不機嫌に携帯電話を置く春樹。

春樹「本当に自分勝手なんだから……」

と、イライラするように、夏希の衣類をその場に投げ捨てると、大きなため息をつく。

11 マンション・川村家・ダイニング（朝）

朝食を摂っている浩輔、靖司、謙輔。

浩輔「母さん、まだ寝てるのか？」

靖司「ああ……」

浩輔「いい加減にしてもらいたいよ。俺が自分で進路を決めたって言うけど、もう一年半近くも前の話じゃないか。それを未だに根に持って、昨日みたいなこと言うんだよ。酒におぼれた生活をこのまま続けて

たら、今に死ぬことにもなりかねないんだぞ」

靖司「それは分かってるよ……」

浩輔「だったら病院連れてけば良いだろ。この一年半、ろくに家のこともやらないで、酒ばっかり飲んで……。主婦なのに主婦らしいこともしないで、俺たちだけでやってるじゃないか。いてもいなくても変わらないだろ」

靖司「いい加減にしろッ」

浩輔「じゃあ父さんはこのままで良いのか？ 家においても何にもしなくてただ酒ばっかり飲んで、このままほっといたら、取り返しのつかないことになるぞ。アルコール中毒だって、立派な病気なんだ。専門の病院で治療してもらうのも大事だろ。何個コップ割って、何回俺の文句を言ってるか……。それ考えたら、入院させてそんな声聞かなくなるほうが、よっぽど良いよ。よく考えといて」

靖司「けど、入院となると、見舞いも大変だし、面倒見る人も必要だろう？」

浩輔「完全看護の設備がある病院探せば良いだけだろ。散々俺たちに迷惑かけてきたんだ。入院したあとまで迷惑かけてほしくないんだよ。俺だって、少し母さんと距離置きたいんだよ」

靖司「……」

謙輔「……」

浩輔「これ以上振り回されるのはたくさんなんだよ。父さんだって、仕事があるのに、家のこととして、母さんの心配して大変だろ？ 入院すれば、母さんの心配する必要がなくなるんだ。せいせいするだろ。俺、歯磨いたら、すぐ行くから。じゃあ」と、出ていく。

謙輔「浩輔の言うことも、一理あるかもな」
靖司「お前も、母さんを入院させるつもりなのか？」

謙輔「そつちのほうが、おふくろのためにも

良いと思うんだ」

靖司「けど、どこの世界に女房を病院に押し込めるような真似をする亭主がいるんだよ。そんなことできるわけないだろ」

謙輔「それしかもう選択肢がないところまで来てるんだぞ」

靖司「……」

謙輔「入院のこと、前向きに考えたほうが良いぞ。このまま放っておいたら、今に我が家は崩壊するぞ」

黙ってしまふ靖司。

12 同・同・靖司夫婦の部屋／廊下

愛子が寝ている――廊下から覗く浩輔。
その顔は、恨めしそうな顔をしている。

13 中央高校・新聞部室（夕）

新聞部員たちが、新聞作りなどの活動
をしている。

春樹も、デスクに座ってパソコンに向

かって作業をしている。

と、ドアのノック音が聞こえ、亮が入ってくる。

亮「春樹、ちよっと良いか？」

春樹「うん」

14 同・廊下

春樹と亮が話している。

春樹「和哉が？」

亮「ああ。俺と利枝子と春樹に話があるから
って」

春樹「じゃあ、今日早めに部活切り上げよう
かな。どっかで集まる感じ？」

亮「それが、ここに来るって」

春樹「ここに？」

亮「学校帰りに、ここに寄るらしい。だから、
校門前で待つといて欲しいって」

春樹「何の話だろ？」

亮「俺にも分からない」

春樹「もしかして、聡実のことかな」

亮「聡実……？」

春樹「いや、この間和哉に呼ばれて、聡実の最近の様子聞かれたんだよ」

亮「最近の様子？」

春樹「うん。でも、真由子のお祝いの後は会ってないし、どちらかといえば、和哉のほうが、毎日聡実と会ってるから、和哉で分らないことは、俺にも分からないって言うつといたけど、利枝子や亮君まで呼ぶなんて、またどうしたんだろう……」

亮「何かあったのかな」

春樹「……」

亮「和哉が、俺たちに相談してくるなんて珍しいし」

春樹「確かに。よくよく考えれば、中学の時って俺や亮君が、和哉に相談したり、勉強教えてもらったことのほうが多かったも
んね」

亮「そうだよな。どうしたんだろう、あいつ」

春樹も亮も難しい顔をしている。

15
道

浩輔のバイクが走っている。

信号が赤に変わり、バイクが止まる。

浩輔、愛子の声を思い出す。

愛子の声「あの子と、親子の縁切りたいわよ。

あんな失敗作……」

愛子の声「何が立派よ。親の言うことも聞かないで、勝手に進路決めるような息子に、どうやって愛情注げって言うのよ。あの子の育て方、間違えたのかもしれない……。産むんじゃなかった……」

浩輔「……」

信号が青に変わり、バイクが再び走って行く。

16
中央高校・校門前

春樹、利枝子、亮、和哉が話している。

利枝子「確かなの、その話？」

和哉「ああ……」

春樹「真由子のこと気にかけて、真実ちゃんが産まれたこと喜んでたのに……。まさか、そんなことになってるなんて……」

亮「亡くなったお姉さんと同じ境遇に立たされてるってわけか……」

和哉「俺も、もう少し早く気づいてあげれば、聡実の精神的なダメージだって少なかっただろうに……」

春樹「和哉のせいじゃないよ。俺たちだって、何度も聡実に会ってたのに、何にも気づいてあげられなかったんだから……。それに俺は、お姉さんのときだって、何にも……」

利枝子「春樹……？」

春樹「亡くなる三日前だったかな……。俺、お姉さんに会ってるんだよ……。まさかあの時、亡くなるなんて誰も思わないじゃん」

利枝子「そうだったんだ……」

和哉「聡実もお姉さんも、一人で悩み続けてたんだよ。だからこそ、聡実の事情を知ってた今、聡実のこと、ほっとけなくてさ」

春樹「和哉……」

和哉「もし聡実に出会ったら、少しでも話を聞いてやってほしいし、相談にも乗ってあげてほしいんだ。俺は、学校にいる間しか、聡実のことは見てやれない。聡実にもしものことがあったらと思うと、俺も不安なんだ……」

春樹「……」

利枝子「……」

亮「……」

和哉「これ以上、聡実に苦しい思いなんてしてほしくないんだよ」

亮「和哉……」

和哉「協力、してくれるか？」

春樹「当たり前でしょ。聡実に辛い思いなんてさせない。俺たちだってついてるんだから。そりゃ、ずっとなつてわけはいかないけど、気にかけてくようにするから」

利枝子「そうだよ。聡実は、私たちにとってかけがえのない親友なの。困ってるときは

助けるよ。私だって、中学校のとき何度聡
実に助けられたか」

亮「俺だって、遅刻しないようになって、たま
に朝、俺の家に寄ってくれたこともあった
んだ。遅刻して先生に怒られずに済んだの
は、聡実のおかげだからな」

和哉「みんな、ありがとう……」

微笑んで頷く春樹、利枝子、亮。

17 マンション・川村家・玄関（夜）

浩輔が帰宅する。

ダイニングから、愛子の怒鳴り声が聞
こえてくる。

愛子の声「冗談じゃないわよッ」

浩輔、慌ててダイニングへ行く。

18 同・同・ダイニング

浩輔、入る。

愛子が興奮したように、靖司や謙輔に
怒鳴っている。

愛子「あんたたちは、そんなに私を病院に閉じ込めたいのッ？」

靖司「そうじゃないッ。これ以上、お前を放っておいたら、取り返しのつかないことになるんだ……。アルコール中毒を治すには、入院させるのが一番なんだ」

謙輔「家のことは心配しなくて良い。俺たちだけで何とかやってくから。今はとにかく、治療に専念してほしい、それだけなんだよ」

愛子「私は病気じゃないのッ。ちよつと嫌なことがあったから、お酒で紛らわしてるだけなの。勝手に病気扱いしないでよッ」

浩輔「（突然怒鳴って）病気だよッ、病気で外の何物でもないッ」

愛子「浩輔……」
浩輔「あんたのせいで、俺たちがどれだけ迷惑してるか。病院でもどこでも行っちゃえば良いんだよ」

愛子「元はと言えば、誰のせいだと思ってるのよ。みんな、あんたのせいじゃないのッ。」

あんたが、今のこの川村家を滅茶苦茶にし
たんじゃないのよ。よくもそんな偉そうな
こと言えるわね。あんたこそ出てけば良い
じゃないのッ」

と、グラスを浩輔に投げつける。

床に落ちて、グラスが割れる。

素早くグラスの破片を拾い始める靖司。

愛子を睨めつける浩輔。

愛子「何よ、その顔……」

浩輔「……」

愛子「恨むんだったら恨めば良いじゃない。

私だって、あんたには恨みしかないわ」

浩輔「ああそうだよ。俺だってあんたには、

恨みしかない。あんたのこと、もう母親だ

なんて思わないよ」

靖司「浩輔ッ（と怒鳴る）」

愛子「上等よ。私だって、あんたのこと息子

だなんて思わないわッ」

憤然と飛び出していく浩輔。

謙輔「おい、浩輔ッ」

と、飛び散っているグラスに気をつけながら浩輔の後を追っていく。

19 夜の道

浩輔が歩いている——謙輔がその後を追う。

謙輔「浩輔ッ」

浩輔「当たり前だろ。今日という今日は、はっきり親子の縁を切る決心がついた」

謙輔「浩輔……」

浩輔「心配するなって、別に家出するつもりはないから。ちよつと、気分転換に外に出ようと思ったただけだから」

謙輔「なら良いけど……」

浩輔「母さんは俺のことを恨んでる。寝に帰ってくるだけがちよつど良いのかもしれない。あの人と顔合わせると、結局は口論になるし」

謙輔「じゃあ、どうするんだよ」

浩輔「適当にフラフラしてくよ。ちゃんと帰

ってくるから、心配するなって」

と、走り去っていく。

謙輔「おい、浩輔ッ」

浩輔の後ろ姿を呆然と見送り、立ち尽くしている謙輔。

20 総合病院・全景（翌日）

21 同・ロビー

浩輔が座って待っている。

と、一人の医師がやってくる——真由

子の父・哲男（48）である。

哲男「いやあ、浩輔君」

浩輔「（立ち上がって）すみません、お忙し

いのお呼びしてしまっ……」

哲男「良いんだよ。久しぶりに浩輔君の顔を見られて良かったよ。ま、ここじゃないんだから、医局で話でも」

浩輔「いや、要件が済んだらすぐに失礼しますから」

哲男「そっか。じゃ、ここで。ま、座って」

と、座椅子に座る浩輔と哲男。

哲男「そういえば、真由子の退院のときは、聡実ちゃんと手伝いに来てくれたみたいで、ありがとう。あの日は、手術が長引いてて、真由子の退院に付き添えなかったんだ。真由子一人で、真実を産むことになってしまつて……。たった一人の親なのに、父親らしいことなんて何も……」

浩輔「おじさん……」

哲男「あ、ごめんね。こんな話しちゃつて……」

それで、要件つていうのは？」

浩輔「実は、病院を紹介してもらいたいんです。アルコール中毒を治療できる病院を」

哲男「アルコール中毒？」

浩輔「実は、僕の母、アルコール中毒になつてるんです。家事もやらなくて、ずっと酒飲んでばつかで……。酒がないと落ち着かない感じで、ちゃんとアルコールと決別できるように、治療ができる病院はないかと

思つて……」

哲男「そんなことになつてたのか……。そういう理由なら、紹介しよう。早いうちに探して、真由子にでも言付けておくよ」

浩輔「よろしくお願いします」

と、深々と頭を下げる。

哲男「浩輔君は、昔から真由子と良くしてもらつてるんだ。協力はさせてもらうよ。真由子は、浩輔君たち友達しか頼れる人はいないんだ。浩輔君も知つてのとおり、私の妻は私と真由子を捨てて、他の男の所へ行つてしまった。片親だけになつても、医者をしてる私には、真由子の面倒を見ることもできなくて、父親として恥ずかしい限りだよ……。父親らしいことをしてやれなかつたから、年上の男性に甘えたかつたのかもしれないな。たとえそれが、妻子のいる男の人でも……」

浩輔「……」

哲男「真由子が高校を辞めて、たとえ未婚の

母になったとしても、子どもを産んでくれたこと、良かったと思ってるんだ。それがあいつの幸せだからな」

浩輔「そうですか……」

哲男「浩輔君、これからも真由子のことよろしく頼む」

浩輔「はいッ」

と、笑顔で微笑む。

22 中央高校・全景（朝）

23 同・昇降口

春樹が登校してきて、靴を履き替える。

と、利枝子も登校してくる。

利枝子「おはよう、春樹」

春樹「おはよう、利枝子」

利枝子「ねえ、春樹」

春樹「何？」

利枝子「私、分かったの」

春樹「何が？」

利枝子「聡実の好きな人」

春樹「嘘……。誰？」

利枝子「和哉だよ、和哉ッ」

春樹「和哉？ どうして？」

利枝子「この間、聡実がいじめられてるって話したでしょ。多分聡実は、自分を助けて

くれた和哉のことを好きになったんだよ」

春樹「聡実が、和哉のことを……」

利枝子「可能性はあるでしょ」

春樹「まあね……。でも、いくら助けたからって、そう簡単に好きになるかなあ」

利枝子「女の子がいじめられて、それを男の子が助けてくれたら、好きになるのは当然でしょ」

春樹「少女漫画の見すぎだよ、利枝子は」

利枝子「そうかなあ」

春樹「和哉が、聡実を、かあ……」

利枝子「私の恋愛予報は、結構当たるって評判なんだから」

24 滝雀学園高校・全景（朝）

25 同・図書室

和哉が勉強をしている。

と、和哉の携帯電話の音が鳴る。

鞆から携帯電話を取り出す――届いた

メッセージを見る和哉。

26 同・倉庫

和哉、入る。

待っていた聡実が、振り向いて迎える。

聡実「ごめん、急に呼び出して」

和哉「いや、全然」

聡実「……」

和哉「また、何かあったのか？ 香澄たちに

何かされたのか？」

聡実「そうじゃないの……」

和哉「……？」

しばらくうつむいている聡実。

春樹、利枝子、亮が話している。

利枝子「間違いないって、私、確信してるんだから」

亮「いくら、いじめから助けてもらったからって、そんなことで好きになるか？」

春樹「利枝子は妄想が激しすぎるからね」

利枝子「(ムツとして) そんなことないッ。

女子っていうのはね、ピンチのときに男子に助けてもらおうと、胸がキュンとして、好きになっちゃうものなんだよ」

春樹「(皮肉に) それは、俺たちへの当てつけですか？」

利枝子「そんなんじゃないよ。いつも聡実といるわけじゃないから、聡実の気持ちの変化なんて分からないよ。けど、ここ数日の聡実の話と和哉の話聞いてたら、聡実が好きな人は和哉しか考えられないから」

春樹「だったら、本人に聞いてみたら良いでしょ。自分で勝手に予想して、勝手に盛り

上がってるだけなんて、バカバカしい」

利枝子「そういう言い方ないでしょ。私、今回の聡実のことには、自信持ってるんだから」

亮「その自信がどこから出てくるのか知りた
いもんだけどね」

利枝子「自信……？ それはあれだよ、女の
勘ってやつだよ」

うんざりしたような顔の春樹と亮。

28 滝雀学園高校・倉庫

和哉と聡実が話している。

和哉「……本気なのか？」

聡実「（うつむいたまま）うん、好きなの……
……和哉君のことが」

和哉「（動揺しながら）いや……その……何
ていうか……まさか、聡実にそんな風に言
われるなんて思わなかったから」

聡実「良いの……。和哉君に、その気がない
んだったら、断ってくれて良いの。その覚

悟はできてたから……。ただ、私の気持ち、
分かってほしかったから……」

和哉「聡実……」

聡実「やっぱり良いッ。ごめん、忘れてッ」
と、飛び出していく。

和哉「おい、聡実ッ……」

一人呆然と立ち尽くしている和哉。

29 同・廊下

聡実が小走りで歩いている——少し息
が荒くなっている。

30 同・中庭

自販機でジュースを買っている和哉——
聡実の声が蘇る。

聡実の声「良いの……。和哉君に、その気が
ないんだったら、断ってくれて良いの。た
だ、私の気持ち、分かってほしかったから
……」

和哉「告白か……」

と、大きくため息をつくど、ジュースを飲む。

31 中央高校・二年A組教室

昼食を食べている生徒たち——春樹、利枝子、亮、亜沙美、剛士、奈々が話している。

亜沙美「分かるなあ、その気持ち。やっぱり、ピンチを救ってくれたら、誰だってその男の子を好きになるって」

利枝子「やっぱりそうでしょ」

亮「妹のいる俺にも、そんな乙女心分からないないな」

春樹「俺だって分かんないよ」

利枝子「何をひがんでるんの」

春樹「別にひがんでなんか……。けど、もし仮に利枝子の予想が当たったとしても、まだ和哉本人は知らないでしょ」

利枝子「うん。片想いだって言ってたから」
剛士「片想いか……。それは、先が見えない

パターンだな」

亮「そうだろ。(と利枝子に)片想いで止まるなんて、よくあることじゃねえか。そんなに騒ぎ立てるほどのことじゃないだろ」

利枝子「そうかもしれないけど、もしここで聡実が告白したらすごいと思わない。ずっと純粹に真面目にやってきた聡実が人生で初めて恋をしたんだよ。小説にしたら面白そうかもね」

春樹「何でちよつと上から目線なんだよ。付き合ってる男もいないくせ」

利枝子「(ムキになって)いないんじゃないの、作る余裕がないだけなんですう」

春樹「どうだかねえ」

奈々「何か良いな、私そういう話好きだよ。また何か進展あったら教えてよ。楽しみにしてるからね」

亮「(春樹と剛士に)本当に、女心って分からないな」

苦笑して頷く春樹。

和哉が待っている。

と、聡実が駆け込んでくる。

和哉「悪かったな、逆に俺が呼び出すようなこととして……」

聡実「ううん、大丈夫。それより、どうしたの？」

和哉「……」

聡実「和哉君……？」

和哉「聡実……」

聡実「……」

和哉「俺、よく考えたんだ……。あいつらから、聡実を助けたのは、ただいじめられっ子を救おうっていう気持ちじゃない……。

聡実のことが好きだからあんな行動に出たんだと思う」

聡実「……」

和哉「聡実……」

和哉、聡実を抱きしめる。

聡実「！」

和哉「俺なんかで、良いのか？」

頷く聡実。

和哉「そうか……」

聡実「けど、和哉君……」

和哉「……？」

聡実「無理しなくて良いから……」

和哉、聡実から離れると、

和哉「無理なんかしてない……。聡実の気持

ち知って、嬉しかった。俺を頼りにしてく

れてるんだなって……」

聡実「言おうか迷ったんだよ。もし嫌われた

らどうしようって……」

和哉「嫌うわけないだろ……（と苦笑する）」

聡実「和哉君。実は、初めて好きになったの

は、私を助けてくれたときからじゃないの」

和哉「……？」

聡実「私……中学の時からずっと……」

和哉「聡実……」

聡実「和哉君……」

いつまでもお互いを見つめあう和哉と
聡実。

それを、ドアの陰から盗み聞きして
いる者がいる——香澄である。

33 同・二年二組教室

紗耶香が荷物をまとめて帰ろうとして
いる——出ようとする、香澄が立ち
ふさがる。

一瞬、睨み合う紗耶香と香澄。

紗耶香「何？」

香澄「あんたの友達、腹黒いね」

紗耶香「どういうこと？」

香澄「聡実ったら、助けてもらったからって
いう単純な理由で和哉のことを好きにな
ってると思ったら、そうじゃないんだよ」

紗耶香「聡実が、和哉を……？」

香澄「（皮肉に）中学の時から、ずっと好き
だったんだって。まじめちゃんかと思っ
たら、心の中ではそうやって男への愛を求め

てたんだよ、聡実は。しかも、あんたが告白した和哉に」

紗耶香「どうしてそれを……」

香澄「別に良いでしょ。ただ、友達 of 聡実だったなら、紗耶香が和哉のことを好きだったこと、知ってたんじゃないの？」

紗耶香「聡実の前で、恋バナなんてしたことなかったし……」

香澄「自分のことで精いっぱいなんて、もつともらしい理由つけてたけど、結局和哉だって、聡実のことが好きだったから、紗耶香の告白、断ったんでしょ」

紗耶香「そんな話聞いて、私があんたの肩持つとでも思ったの？」

香澄「これを聞いても、まだそんなこと言えるの？」

と、ポケットから携帯電話を取り出し、録音していた声を再生する。

和哉の声「俺なんかで、良いのか？　そうか……」

聡実の声「けど、和哉君……。無理しなくて
良いから……」

和哉の声「無理なんかしてない……。聡実の
気持ち知って、嬉しかった。俺を頼りにし
てくれてるんだなって……」

聡実の声「言おうか迷ったんだよ。もし嫌わ
れたらどうしようって……」

和哉の声「嫌うわけないだろ……。 (と苦笑す
る)」

聡実の声「和哉君。実は、初めて好きになっ
たのは、私を助けてくれたときからじゃな
いの。私……。中学の時からずっと……」

和哉の声「聡実……」
聡実の声「和哉君……」

携帯電話をしまう香澄。

紗耶香「……」

香澄「どう？」

紗耶香、荷物を持って飛び出していく。

不気味な笑みを浮かべる香澄。

34 同・昇降口

紗耶香、来るが、慌てて陰に隠れる。
和哉と聡実が、仲良さそうに帰っ
ていく。

その姿を見て、怒りがこみあげてきた
ように、拳を握る紗耶香——和哉たち
の背中を、睨むように見つめる。

35 中央高校・職員室前の廊下

学級日誌を松野に提出する春樹。

春樹「今日も、無事に平和な一日でした」

松野「ご苦労様。春樹がいると、自然とクラ
スのみんなも和むんだろ。これからも、二
年A組を支えていってくれよ」

春樹「プレッシャーですね（と笑う）」

松野「まあ、そう難しく考えなくても良いん
だよ。気楽に行こうや」

春樹「まあ、気楽が一番なんですけどね……」

松野「どうした？ 気楽になれないことでも
あるのか？」

春樹「先生」

松野「何だ？」

春樹「もしですよ、自分のクラスの生徒の間
でいじめがあったら、先生どう対処します
か？」

松野「まさか、A組でそんなことが……」

春樹「いや、そうじゃありません。誤解しな
いでください。ただ、ちょっと別の高校の
友達が、そういうことで悩んでるみたいで
……」

松野「そうなのか……」

春樹「前にも、いじめで悩んでいる人がいた
んですけど、その人、誰にも相談できなく
て、自殺してしまっただけ……。学校側
は、全否定して、結局納得のいかない結末
になってしまった……」

松野「そういえば、三年前にそんな事件あつ
たな……。よく覚えてるよ」

春樹「はい。そのとき亡くなった生徒は、僕
も知ってる人で……」

松野 「そうだったのか……」

春樹 「その時と同じような状況にはなっ
てほしくなくって……。だから、先生
だったら、どうするかなと思っ
て」

松野 「三年前の事件もそうだけ
ど、学校側は対面を気にして、学
校を守りたいために事実を隠蔽し
ていると思うんだ。俺も、あの事
件は学校側に責任があると思っ
てた」

春樹 「先生……」

松野 「だから俺は、たとえ学校
を敵に回しても、生徒を守り抜く。
教師というのは、学校を守るため
じゃなく、生徒を守るための仕事
なんだから」

春樹 「その言葉聞いて、安心し
ました。先生になら、全てを預け
られるような気がします」

松野 「どうした、急に？」

春樹 「いや……もし、その子
のことでこれ以上問題が大きくな
ったら、先生にも助けてもらおう
と思っ……」

松野「ああ、良いぞ。違う学校の生徒でも、高校生に変わりはない。教師として、できるだけのことはするつもりだ」

春樹「ありがとうございます」

笑顔で頷く松野。

36 墓地

永井家の墓に、手を合わせている和哉と聡実。

和哉「いつも、お姉さんのところに？」

聡実「一週間に一回は、必ず来てるの。あんな納得のいかない結論出されて、一番悲しい思いしてるのはお姉ちゃんだもん。きっと不満を抱いたまま天国に行ったと思う。だからこうやって、いつもここに来て、お姉ちゃんに会ってるの。そうすれば、お姉ちゃんも安心すると思うから。たまに、愚痴を聞いてもらったりしてるの」

和哉「そつか……。亡くなった後も、心配してくれたり、ちゃんと会いに来てくれる人

がいて、お姉さんは幸せ者だな」

聡実「私にとっては、たった一人のお姉ちゃんだもん。それに、家に帰ったって、あの女が家のことやってるから、私の居場所なんてないの。学校にも私の居場所はないと思っただけど、もう安心できる。和哉君がいるから（と微笑む）」

和哉「今日が、俺たちの記念日だな」

聡実「毎月記念日迎えたら、お姉ちゃんに報告しようね。お姉ちゃんが不幸のまま人生終わった分、お姉ちゃんの方まで私が幸せになるから」

和哉「（墓に向かって）お姉さん、聡実には決して悲しい思いはさせません。これから、見守っていてください」

聡実「お姉ちゃん、また来るね」

和哉「失礼します」

と、去っていく。

香澄と裕梨が、ケーキを食べている。

裕梨「ここのチーズケーキ、美味しいね。また二人で来ようね」

香澄「今度は一人増えるかもよ」

裕梨「え……誰か誘う予定なの？」

香澄「紗耶香だよ」

裕梨「紗耶香……？ どうして？」

香澄「あの女は、今日から私たちの仲間になるんだよ」

裕梨「何があったの？」

香澄「聡実、和哉に告白して、今日から付き合うことになったの」

裕梨「マジ……!？」

香澄「紗耶香だって、和哉に告白したのにな。でも、その紗耶香の告白は断っても、聡実の告白には、和哉OK出しちゃうんだから。和哉も聡実も、紗耶香の気持ち、全然分かってないんだから」

裕梨「最低だね、聡実も和哉も」

香澄「だから、紗耶香を私たちの仲間に入れ

ようと思つて」

裕梨「賛成ッ」

企んだような微笑で、頷く香澄。

38 滝雀学園高校・倉庫（数日後）

聡実が弁当を食べている――和哉は、コンビニのパンを食べている。

聡実「いじめられた現場が、まさか私の告白の場となって、私たちの昼食会場にもなるなんて思わなかった」

和哉「俺だって同じだよ。けど、こういうのも良いもんだな。誰もいない二人つきりで、弁当食べるのも」

聡実「弁当つて、和哉君いつもコンビニのパンじゃん。それだけでお腹膨れるの？」

和哉「まあな」

聡実「けど、残つて勉強するんだもん、ちゃんと弁当ぐらい用意しないと」

和哉「我が家には弁当を作る余裕のある人なんていないんだよ。聡実のところとは違う

んだから」

聡実「残念でした。この弁当は、いつも私が作ってるの」

和哉「マジで？」

聡実「当たり前でしょ。継母の弁当なんて食べたくもないんだから」

和哉「聡実……」

聡実「今度、和哉君の分も作ってあげるね。一人分も二人分も変わらないもん」

和哉「弁当作ってもらうなんて、何年ぶりだろう。うちは、中学に入ったと同時に親が会社の規模を広げて忙しくなったから、たまたま給食じゃなくて弁当になったときは、当時仲の良かった女子が作るって言うてくれてたけどな」

聡実「中学の時から、告白自体はされてなくても、かつこ良い男子で有名だったからね、和哉君。その和哉君を独り占めしちゃうなんて、何だか申し訳ないな……」

和哉「誰に遠慮することがあるんだよ。俺た

ちは付き合い始めたんだから」

聡実「私、今でも不思議なんだよね。和哉君と付き合ってることが。私、これまで男子と付き合ったことがないから、何か実感が湧かなくて……」

和哉「俺だって、こんな経験初めてだよ」

聡実「へえ、意外。私、和哉君にふさわしい女の子になれるかなあ」

和哉「ふさわしいもふさわしくないも、聡実
は聡実で良いんだよ。何も俺に合わせることなんてないんだから。そんなに重たく考えなくても、聡実は今まで通りの聡実で良いんだ。そっちのほうが、俺だって気が楽だから」

聡実「和哉君……」

和哉「まだまだ、これからだからな」

と、聡実の頭を撫でる。

恥ずかしそうに和哉を見る聡実。

40 同・店内

客が出ていく。

レジで会計をしている春樹、

春樹「(客に)ありがとうございました」

寺沢、キッチンから、

寺沢「ありがとうございました。(と春樹に)

春樹君、そろそろ昼休憩にしよう」

春樹「はい」

と、表に行き、看板を片づける。

寺沢、テーブルにサンドウィッチやサ

ラダなどを用意する。

寺沢「どう、店には慣れた？」

春樹「(苦笑して)いえ、まだまだですよ」

と、寺沢を手伝う。

寺沢「けど、春樹君はしっかりやってるよ。

こんなちっぽけな喫茶店で、こんなに一生

懸命やってくれる若い子がいるんだから。

働き甲斐があるよ」

春樹「ちっぽけだなんて……。どんなに小さ

な店でも、一国一城の主に代わりはないんですよ。リピーターの方も増えて、このコーヒーが美味しいとか、ここのサンドウィッチじゃないとダメだっというこだわりをお持ちのお客さんだっといういらっしゃるんです。これからも、よろしくお願いします」

寺沢「今日は、夕方から雨だっって言ってたけど、大丈夫そうかな」

春樹「(窓から空を見ると)今のところは晴れてますけど、どうでしょうねえ。最近温暖化で、天気の変動が激しいですからね」

寺沢「もし今日雨が降ったら、お客さん、減るだろうなあ。まあ良いや。ランチにしよう」

春樹「はいッ」

41 動物園

和哉と聡実が歩いている。

聡実「動物園なんて久しぶり。昔、よく家族

四人で来てたけど、もうすっかり縁がなくなっちゃったって思ってた」

和哉「俺だって、小学校の時までは、よく休日は家族で出かけてたよ。どんなに忙しくても、休日は家族サービスをしようって両親が言い出して、休日は家族でどこかへ出かけるのが当たり前になってたのに、ここ数年はそんなこと……」

聡実「だから、私を誘ったんでしょ。遊園地のデートも良いかもしれないけど、動物園でのデートも悪くないね」

和哉「じゃあ、今度は遊園地でデートするか？」

聡実「そんなつもりで言ったんじゃないよ」

和哉「分かってるよ（と笑う）」

聡実「ねえ、動物って不思議だよ。人間みたくに喋らなくても、ちゃんとコミュニケーション取れてるし、複雑な関係になることもないもんね」

和哉「……？」

聡実「動物には離婚もないしいじめもない。ただ同じ檻の中にいれば、ずっと一緒にいれるんだもん」

和哉「離婚して疎遠になったお母さんと、亡くなったお姉さんのこと言ってるのか？」

聡実「うん……。だから、生まれ変わったら動物園の動物になりたいって思うんだよね。もう、人間になりたいなんて思わない」

和哉「そんな寂しいこと言うなよ」

聡実「あ、ごめん……」

和哉「俺は、生まれ変わっても、また人間になりたいかな。例え家族がいなくなったり変わったりしても、友達はずっと一緒に良いから。聡実とだって、友達とだって、もしかしたらまた一緒にいられるかもしれないだろ」

聡実「……」

和哉、聡実の手を握ると、

和哉「動物園の動物に生まれ変わったら、こ
うやって手を握ることもできなくなるん

だぞ。この五本指で、しっかりと手を握れて、それが幸せだとはつきり表現できるのは、人間だけなんだから」

聡実「和哉君……」

と、微笑んで和哉を見る――少し照れている和哉。

42 アパート・表（夜）

雨が強く降っている。

自転車に乗った春樹が帰宅する――急いで自転車を止め、前かごに乗せているビニール袋をかぶせたケーキの箱を持って、鍵を開けて中に入る。

43 同・谷島家・居間（時間経過）

数ヶ所、雨漏りをしているようで、着替えた春樹がその位置に合わせてバケツを置いていく。

春樹、冷蔵庫からケーキの箱を取り出す。

ケーキの箱を開けて見る——ショート
ケーキ、チーズケーキ、チョコレート
ケーキ、モンブランが入っている。

春樹「美味しそう」

と、ノック音がする。

春樹「はい」

と、玄関に行く。

44 同・同・玄関

ドアを開ける春樹。

和哉と聡実が立っている。

春樹「どうしたの？ 二人とも？」

和哉「雨が弱くなるまで、雨宿りさせてもら
って良い？」

春樹「全然良いよ。さ、どうぞ」

和哉「お邪魔します」

聡実「お邪魔します」

45 同・同・居間

ケーキを皿に乗せて、和哉と聡実に出

す春樹。

春樹「バイト先で余ったからもらったの。せっかく滅多に來ない二人が來たから、一緒に食べよう」

聡実「ごめんね、急に來ちゃって。まさか、デートの帰り道に雨が降ってくるなんて思わなかったから」

春樹「……？ デート？」

和哉「……」

春樹「今、デートって言った？」

聡実「（和哉と顔を合わせながら）実は、私たち付き合い始めたの」

春樹「え、そうなの？ 利枝子の言ってたこと、本当だったんだ」

和哉「利枝子？」

春樹「利枝子、聡実から片想いの人が出來たって聞かされて、誰だろうって思ってたみたいなんだけど、それからしばらくして、和哉が俺たちのところに、聡実のこと話してきたでしょ。その時に確信したらしいん

だよ」

聡実「私のこと？」

和哉「聡実に何かあったら、力になってほしいって、春樹たちに頼んだんだよ」

聡実「そうだったんだ……」

春樹「良かったね、聡実。大事にしてもらえて。いよいよ、仲良し八人組からカップル誕生か。けど、まさか和哉と聡実が付き合うなんてね。やっぱり、助けてくれたヒーローだから？」

聡実「実は、中学校のときから、ずっと……」

春樹「へえ、そうだったんだ……。八人ですつといたから、みんなの心の変化なんて分からなかったわ。俺も亮君も、まさかいじめから助けてもらったから好きになるなんてないだろうって思ってたんだよ。だから、勝手な利枝子の妄想だって、聞く耳持たなかったんだけど、本当だったんだね。

（と苦笑すると）利枝子、自分で恋愛予報は当たるって言ってたんだよ。まさかの予

報的中ってわけだ」

聡実「私だって、片想いで終わるつもりだったんだよ。でも、やっぱり自分の気持ち伝えなきゃと思っ、和哉君に……」

春樹「生徒会長やったことだけはあるね。自分の思ってることを、ちゃんと吐き出したんだから」

聡実「私、これから和哉君に守ってもらおう」
春樹「お幸せで何より。明日、利枝子と亮君にも報告だ（と笑う）」

と、ドアをノックする音が聞こえる。

春樹「誰だろう。今日は、客人が多いね」と、玄関へいく。

46 同・同・玄関

ドアを開ける春樹。

びしょ濡れになった倫子が立っている。

春樹「（驚いて）倫子、どうしたの……。傘も差さないで……。ま、とにかく上がって」
倫子、突然泣き出し、春樹に抱きつく。

倫子「春樹ッ……」

春樹「倫子……？」

和哉と聡実が、怪訝な様子でやってくる。

聡実「倫子？」

和哉「どうしたんだよ、急に？」

倫子「私、優一と別れる」

春樹「え……？」

倫子「あんな男と一緒にいるの、もう限界……」

更に激しく泣き出す倫子。

難しい顔でお互いを見合う和哉と聡実。

呆然と倫子を見ている春樹。

つづく